

# 中国国内の音声教育事情 : 大学の日本語学科における発音指導

著者名(日)	寺田 昌代
雑誌名	言語科学研究 : 神田外語大学大学院紀要
巻	21
ページ	89-99
発行年	2015-03
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1092/00001172/">http://id.nii.ac.jp/1092/00001172/</a>

# 中国国内の音声教育事情

## —大学の日本語学科における発音指導—

寺田 昌代

キーワード：中国国内日本語教育、日本語音声教育、発音指導、外籍教師

### 1. はじめに

国際交流基金（2013）の日本語教育国地域別情報によれば、2012年度現在、中国で雇用されている日本語母語話者教師は2,372名おり、中国国内における日本語教師の約14%を占めている。日本人教師は会話や作文などのアウトプット型授業を担当することが多く、音声教育に関しても大きな役割を担っているといえる。しかし、どのように音声教育に携わっているか、中国人教師との連携がどのようになされているのかなど、中国国内の教育機関における音声教育の実態は明らかになっていないことが多い。

海外での日本語音声教育に関する研究は多くはないが、タイにおける日本語の音声教育の実態を調査した小笠原・河野（2002）では、独自の教育観に基づいて積極的に指導方法を模索する教師がいる一方で、マニュアルを求めるといった受身的な考え方もみられることが報告されている。中村（2013）はベトナムでのアンケート調査から、ベトナム人教師と日本語母語話者教師の長所と短所を分析した。その結果から、学習の問題点における指導の優先順位などを話し合うことや、実際の授業での役割分担など、両者の「協働」を提言している。

本稿は、まず、中国国内の大学における音声教育の実情を把握することを目的としている。日本語学科に在籍する中国人教師及び日本語母語話者教師にアンケートを実施し、指導経験、所属機関に対する音声教育の印象や、発音指導に関する両者の異同点を分析、考察する。また、日本語学科で指導を受けた学生にも調査を実施し、学生の経験や感想を求め、三者の考え方の相違点、共通点を分析し、中国国内の大学での音声教育の問題点を明らかにする。

なお、近年、中国人と同じ待遇で勤務する日本人教師も増えてきたが、調査の目的上、日本語母語話者であっても調査の対象から外している<sup>1</sup>。このような形態の日本人教師と区別するため、本稿では、中国籍に対するものとして外籍教師という名称を用いる。

## 2. 調査

### 2.1 調査対象

調査対象者は、中国国内の大学の日本語学科に在籍する中国人教師、中国国内の大学の日本語学科に在籍経験を持つ外籍教師、学生の3グループである<sup>2</sup>。なるべく多くの地域の情報を収集するため、多数の大学関係者に調査を実施した。学生は学習環境をできるだけ近づけるため2011年から2013年に中国国内の大学の日本語学科を卒業した現役の大学院生という条件を加えた<sup>3</sup>。

調査は、協力者にメールで調査票を送り、可能であればその協力者から別の協力者に依頼し、調査票を回収するという方法をとった。プライバシー保護の観点から、氏名、大学名は任意での回答としたが、大学所在地は必須事項とした。回答に対する信頼性と大学所在地の手掛かりがなくなることから、大学名、大学所在地の両方が未記入の回答は無効としている。以下は有効回答数として得られた調査協力者の内訳である。

A 中国人教師30名（中国国内の大学の日本語学科に在籍する中国人教師）

大学所在地：寧夏7、北京6、天津6、陝西5、湖北3、河北2、遼寧1

B 外籍教師30名（中国国内の大学の日本語学科に在籍経験を持つ日本人教師）

大学所在地：北京8、福建7、天津3、陝西4、寧夏2

吉林1、広東1、河北1、江西1、山東1、上海1

C 学生54名（中国国内研究生<sup>4</sup>25名、日本の大学院留学生29名）

大学所在地：北京13、天津5、上海3、遼寧2、山東6、四川4、黒竜江4、広東2、陝西3、河北3、重慶2、江蘇、湖北、河南、雲南、江西、安徽、浙江、各1

### 2.2 調査内容

調査内容は三者への共通の質問、教師への質問、学生への質問に分かれる。

各協力者グループの調査票は部分的に異なるため質問項目は調査結果と考察の各節で示すこととする。

### 3. 調査結果と考察

#### 3.1 三者への共通の質問項目

発音指導経験の有無（学生への質問は発音指導を受けたことがあるかどうか）、発音指導はいつ、どの授業で行われたか、発音指導の必要の有無と適切と考える指導の時期、指導者に適任と思われる教師（教師側には中国人教師と日本人教師のどちらが適任か、学生側にはどちらの指導を受けたいか）を三者への共通の質問とした。

共通の質問に対する回答をまとめたのが表1である。発音指導に関してはほとんどの協力者が有ると回答したが、無いという回答も数名見られた。教師の回答で指導経験がない理由としては、「発音を指導する科目を受け持っていない」「発音指導の担当者が決まっている」が挙げられた。学生の回答で指導経験がないという理由は、「発音指導だと認められるほどの指導を受けていない」というものであった。

指導した学年は、中国人教師が1年生という回答が多く、外籍教師は2年生が多い。外籍教師にはことばの問題もあり、2年生以上のクラスを担当するケースが多いためこの結果は当然ともいえる。しかし、教師側と学生側の回答を比較すると、教師側は3年生以上に指導したことがあると回答しているのに対し、学生側の回答では3年生1名で、4年生という回答はない。外籍教師の回答では2年生、3年生が半数以上にのぼるが、学生がこの時期に指導を受けたという印象は薄いようである。指導した科目においては、中国人教師は精読、外籍教師は会話が一番多かったが、学生側には視聴説という回答も多い。

教師側と学生側の所属機関が同一ではないため偶然の可能性は否めないが、指導する側とされる側に発音指導の意識の違いがあることを表している。指導の学年が食い違った原因には、学生が入門時の五十音の練習を発音指導ととらえた点が挙げられるだろう。前述のように、外籍教師はほとんどの場合入門時に発音指導を担当することがなく、指導する時期は主に2年生の授業となる。指導に関して「間違いを発見した都度」という補足コメントが少なくなく、これが、学生にとって発音指導と受け止められていない可能性もある。視聴説は、

多くの大学で聴解の授業と位置づけられており、教える側は学習者の発音の誤りを指摘することではなく、聞き取りの正誤に注意を向けることが多い。そのため、質疑応答などで学習者の発音に誤りがあっても、指導対象にしないことが考えられる。また、指導したくても時間が取れないなどの事情もあるだろう。一方、学生側は聞き取ることも発音を学習する機会だと感じているのではないだろうか。聴覚教材に用いられるナレーションやアナウンスが発音の模範となることは言うまでもない。これを利用して、視聴説の授業で発音指導を行うことも十分可能である。

表1：共通質問の結果（表内の数字は実数、括弧内は百分率1%未満四捨五入）

	指導有無		指導の学年(複数回答)				指導の科目 <sup>5</sup> (複数回答)			
	有	無	1年	2年	3年	4年	精読	会話	視聴説	他
A	27(90)	3(10)	20(67)	15(50)	9(30)	5(17)	23(74)	5(17)	7(23)	8(27)
B	23(77)	7(23)	18(60)	21(70)	13(43)	3(10)	2(7)	21(70)	5(17)	16(53)
C	50(93)	4(7)	50(93)	12(22)	1(2)	0(0)	46(85)	40(74)	23(43)	1(2)

	指導の必要性		指導が必要な時期 <sup>6</sup> (複数回答)				指導に適任と思われる教師 <sup>7</sup>					
	有	無	1年	2年	3年	4年	記入なし	日本人教師	中国人教師	両方	他	記入なし
A	26(87)	4(13)	25(96)	1(4)	0(0)	0(0)	0(0)	18(69)	2(8)	3(12)	2(8)	0(0)
B	29(97)	1(3)	27(93)	17(59)	4(14)	3(10)	1(3)	9(31)	4(14)	12(41)	4(14)	0(0)
C	53(98)	1(2)	52(98)	7(13)	1(2)	1(2)	0(0)	34(64)	2(4)	13(25)	4(8)	1(2)

なお、指導にあてた科目の「その他」の回答には、選択科目として設置されている発音の授業、入門時の2週間の集中指導、スピーチコンテストの指導などが挙げられている。

発音指導の必要性に関しては、ほとんどの協力者が発音指導の必要はあると

回答したが、指導が必要な時期については若干の違いが見受けられる。中国人教師は1名を除いてすべて1年生と回答したのに対し、外籍教師は2年生以上の指導も必要との回答が少なくない。学習者の発音に対する評価が外籍教師のほうが厳しいことを推測させるが、教師への共通質問である学生の発音の印象はこれとは多少異なる回答を得ている。個人差があることを理解したうえで全体的な学生の発音に対する印象を質問し、回答を五段階に分けた結果が表2である。質問は全体に対する印象であるが、「一部の学生だけが良い」という回答が複数あったため別に欄を設けた。

表2: 学生の発音の印象(評価)(外籍教師無記入1名,百分率は1%未満四捨五入)

	良い	比較的良い	どちらとも言えない	あまり良くない	良くない	一部の学生だけが良い
中国人教師30名	2(7%)	14(47%)	1(3%)	5(17%)	4(13%)	4(13%)
外籍教師29名	11(38%)	7(24%)	5(17%)	4(14%)	0	2(7%)

外籍教師に「良くない」という回答はなく、「良い」の回答の中には、かなり良い、単語レベルではすばらしいなどのコメントの記入もみられた。これに対し、中国人教師の回答で最も多いのは「比較的良い」ではあるものの、「良くない」という回答もある。「一部の学生だけが良い」という回答も「一部は良いが全体的に良いとは言えない」と、どちらかといえば否定的な評価に傾いている。このような評価の違いに関しては、中国人教師と外籍教師の評価の基準が異なることが考えられる。外籍教師の「比較的良い」「どちらとも言えない」の理由の中には「コミュニケーションに支障をきたすほどではない」という回答が多く、これが発音の基準となり評価を高くしているのではないだろうか。一方、中国人教師の回答には外籍教師のような具体的な理由は挙げられていなかったもので、評価の基準は明らかではないが、約半数の教師が学生の発音が決して良くないと感じている。しかし、指導の時期を2年生以上に求める回答はたった1名にすぎず、中国人教師30名中4名の協力者が発音指導は必要ないと回答していることから、学習者の発音改善への関心度が低いことがうかがえる。

指導に適任と思われる教師に関して、なぜ適任と考えるか、その主な理由を別に表3にまとめた。表内の数字は回答者と割合である。

まず、「その他」であるが、これは、中国人教師と外籍教師のいずれも選択されなかったものである。学生の理由は、「日本人教師の発音も正しいとは限らないので教材のみで良い」「どうせ母語話者と同じようにはならないのだから発音練習をしても無駄」などで、発音指導に期待をしていない声がみられた。教師側の回答には、「日本人並みの発音ができるなら中国人教師でもかまわない」「指導のノウハウがあれば母語は関係ない」などのコメントが記載されており、選択されなかったのは指導の必要がないからではなく、どちらでも構わないという理由からである。指導者の母語よりも教師の発音のレベルや知識の面で条件を満たすことが優先されている。「外籍教師の指導が適している」という回答は、中国人教師と学生の中で多数を占めた。理由として中国人教師の発音が正確でないことが挙げられ、これは外籍教師からも指摘されている。「中国人教師の指導が適している」と考える理由として、教師側は学習者の母語での解説の必要性を挙げているが、学生側にこの理由はなく、学習者としての経験を活かした指導という面が期待されている。「中国人教師、外籍教師両方の指導が必要」という回答は外籍教師の回答に多くみられた。多数とは言えないが、中国人教師と学生側からも中国人教師と外籍教師の連携を望む声がみられる。どのグループからも、それぞれの役割は、概ね、中国人教師が解説を担当し、外籍教師が発話モデルになることが認識されている。しかし、「日本人にも訛りがある」という意見もあり、外籍教師というだけで発話モデルになると結論付けるのはいささか性急かもしれない。前述の「その他」に挙げられた発音指導のノウハウや専門的知識の必要性、外籍教師自身の「日本人だからと断言的に指導できるとは限らない」という回答などから、中国人教師と外籍教師の連携的指導には、中国語による解説とともに音声の基本的知識が求められているといえるだろう。

表3：発音指導者として適任と考える主な理由

	中国人教師のコメント	外籍教師のコメント	学生のコメント
外籍教師指導	<b>18名(69%)</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・中国人教師の発音が正しいとは限らない</li> <li>・日本人は本場の日本語を話せる</li> <li>・生の日本語を聞かせるべき</li> <li>・母語話者のほうがよい</li> <li>・正確な指導ができる</li> </ul>	<b>9名(31%)</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・中国人教師の発音が正確ではない</li> <li>・より正確な発音が期待できる</li> <li>・母語話者であり、尚且つ日本語教育の専門家が望まれる</li> </ul>	<b>34名(64%)</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・外国語を勉強するからには母語話者から指導を受けたい</li> <li>・母語話者の指導が効率的</li> <li>・日本人の教師の発音が正しい</li> <li>・発音は日本人に及ばない</li> <li>・ネイティブが良いという先入観から</li> </ul>
中国人教師指導	<b>2名(8%)</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・初心者には母語で解説が必要</li> <li>・学習経験を活かせる</li> </ul>	<b>4名(14%)</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・初心者には母語で解説が必要</li> <li>・学習経験を活かせる</li> <li>・これまで大きな問題はみられない</li> </ul>	<b>2名(4%)</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・中国人教師の方が間違いがわかる</li> <li>・学習経験を活かせる</li> </ul>
両方の指導	<b>3名(12%)</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・中国人が解説、日本人がフォロー</li> <li>・共同で指導にあたるべき</li> </ul>	<b>12名(41%)</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・モデルは日本人、指導は中国人</li> <li>・日本人は発音できても解説できるとは限らない</li> <li>・連携が必要</li> </ul>	<b>13(25%)</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・日本語での解説はわからないので両方あるとよい</li> </ul>
「その他」と回答	<b>2名(8%)</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・専門知識があればどちらでもよい</li> <li>・発音がきれいなら中国人でもかまわない</li> </ul>	<b>4名(14%)</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・日本人が良いが、日本人並みの発音ができるなら中国人教師が望ましい</li> <li>・発音指導のノウハウがあれば母語は無関係</li> </ul>	<b>4名(8%)</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・教材での学習が必要(授業時間に限りがある、日本人にも訛りがある)</li> <li>・発音を練習しても無駄</li> </ul>



教師側には、所属する学校の発音教育に対する印象を質問した。

「自分の大学が音声教育に対して積極的だと思うか」という質問に対し、中国人教師は回答者30名のうち22名が思う、8名が思わないと答えている。一方、外籍教師は回答者17名のうち6名が積極的だと思う、11名が積極的だと思わないと答えており、両者の間に違いが見られた。中国人教師が積極的だと思う理由には、「1年生から外籍教師が発音指導をしている」「特別なカリキュラムを設置している」などが挙げられた。外籍教師の回答には具体的な理由の記入が少なく、中国人教師のようにカリキュラムを根拠としたものは皆無であった。積極的だと思わない理由は、中国人教師には「新生生の学習開始時数コマの指導では十分でない」、外籍教師の回答理由には、「すべて外籍教師に任せきりである」「発音の良し悪しには敏感だが積極的とは言えない」「学校側の要求で発音を言及されたことがない」「学生のほうが自分の発音に敏感である」などが挙げられた。

これら理由の記入自体が、この質問における中国人教師と外籍教師のもうひとつの相違点でもある。中国人教師側は積極的だと思う理由が明確であり、思わない場合は理由の記入があまりみられない。外籍教師側はその逆であった。つまり、中国人教師は積極的である根拠を持ち、外籍教師は積極的ではないと思う根拠を持っているのである。しかも、中国人教師が根拠として挙げた理由には「外籍教師が熱心に行っている」というものが多く、同じ理由が外籍教師にとっては積極的ではないことの根拠となっている。この点が、まさに、音声教育に対する中国人教師と外籍教師の意識のずれを示しているといえるだろう。

### 3.2 自由回答からみる三者の異同点

発音指導に関して考える問題点や提案を自由回答形式で求めた。

三者に共通する問題点は「発音教育にかける時間が足りない」「体系的な取り組みが行われていない」の二点であったが、中国人教師と外籍教師では問題とするところが異なる点も見受けられた。中国人教師の問題点は主にテキストやカリキュラムの不備、発音を重視しないなど教育方針に目を向けたものが多い。これに対し外籍教師が挙げる問題点は「人数が多く個別に時間をかけられない」「学生のレベル差があり指導が難しい」「発音を訂正すると学生が恥ずか

しがる」など教室内活動に重点が置かれている。専門的知識を持つ指導者が必要という共通の認識もあるが、先の積極性に関する見解と同じく、中国人教師と外籍教師との間にずれがあると言わざるを得ない。

発音指導に対する提案として、中国人教師側から「中国人が間違えやすいことを把握し専門的に指導する」、外籍教師から「発音指導の経験、ノウハウがある教師が1年生の授業を担当する」などが挙げられた。また、中国人教師からは「教える側にも音声に関する研修が必要である」という声もあり、ここでも音指導の専門性を重視する声が多くみられた。指導の時間に関しては、中国人教師から「発音指導の時間を設けるより、他の項目と関連付けて毎回少しずつ練習するほうが効果的である」という意見、学生からは「発音の時間を多くするだけでなく、手助けとなる学習方法があればよい」という意見があった。時間の不足を補うためにも、指導方法の改善がひとつの課題といえるだろう。学生側から出された問題点である「日本語を話すチャンスが少ない」「単語レベルより上の指導がない」などの意見は今後の授業の改善を図る上で非常に良いヒントである。

#### 4. まとめと今後の課題

以上、中国人教師、外籍教師、学生三者の発音指導と音声教育に対する考え方を比較し、考察を進めてきた。三者がともに指摘した問題点は、発音指導にかける時間が少ないという点、体系的な取り組みが行われておらず、指導は各教師の裁量に任されている点であった。また、「積極的であると思う根拠」、「発音指導が必要な学年」、「発音の評価」では、中国人教師と外籍教師の間に認識のずれもみられた。より効率的で効果的な音声教育の実現には、両者の連携を図るとともに、発音教育にあてる時間や教育の質が学習者の目標や満足度に合致しているかどうかの再検討を行う必要がある。

中国の大学の日本語学科に在籍する中国人教師は、学部授業以外、大学院の授業や他学部の第二外国語としての日本語の授業も担当する。このほか、行事、会議、出張、事務関係の業務などもあり多忙を極めている。そして、外籍教師は各大学に1名、多くても3名程度であり、担当する科目は多岐にわたる。このような環境の中で、音声指導のために両者の話し合いの時間を設けることは大きな課題といえる。

今回実施したアンケートでは、このほか、所属する大学の音声教育の状況、学習者の個別の発音に対する評価や問題のある発音、授業での使用言語と担当経験のある科目名なども調査しているが、紙幅の関係もあり割愛した。中国国内の現場で教師が感じている学習者の発音の問題も引き続き分析、考察していくつもりである。また、今回の調査をパイロットに、今後も中国国内の音声教育事情に関する調査を進めていきたいと考えているが、そのための課題も存在する。まず、一つの大学に在籍する外籍教師は1名から3名程度であり、同一大学内で中国人教師との比較調査ができない。もうひとつは、外籍教師が個人的に実施する調査には限界があることである。

筆者の経験からも、中国国内では音声教育を重要視していないと言わざるを得ない点があり、このような調査を地道に続けることにより、少しでも音声教育の認知度が挙げられるよう努力していきたい。

## 謝辞

今回の調査ではたくさんの方が快く調査を引き受けてくださいました。対外経済貿易大学の先生方をはじめとする中国人教師のみなさん、北京日本語教師会、西安日本語教師会の先生方、厦門大学の任星先生、そして学生の調査に尽力いただいた東京大学博士課程の靳園元さんに心よりお礼を申し上げます。

## 注

- <sup>1</sup> このような日本人教師は日本語以外の専門で博士号を取得していることが多い。また、雇用形態の違いは、各機関の学習のコースデザインに関わる点においても大きな違いがあることから対象から除外した。
- <sup>2</sup> 各グループに同一の教育機関が数校存在したが、教師と学習者では依頼のルートが全く異なるため、A、Bで回答した教師に直接教わった学習者がいるかどうかは不明であり、関係性を考慮していない。
- <sup>3</sup> 中国の大学入試制度では希望した学部に入學できるとは限らず、就職する学生と進学する学生とでは学習態度に差が出る場合があり、学習環境の差を少しでも減らすため現役の大学院生を対象とした。
- <sup>4</sup> 中国国内では大学院修士課程に在籍する学生を研究生と呼ぶためこの名称を使った。
- <sup>5</sup> 指導の科目について。精読、基礎日本語、総合日本語など科目名や教科書名は統一されていない。

いものの、中国では精読という学習方法を通して音声の基礎や文法、会話を学ぶ。そのためこの名称を用いた。視聴説は「見る・聞く・話す」という意味であり、LL教室（CALL教室）で行われることが多い。

<sup>6</sup> パーセンテージの母集団は指導の必要があると答えた人数である。

<sup>7</sup> 同上

## 参考文献

- 大坪一夫（1990）「音声教育の問題点」『講座日本語と日本語教育3』pp.23-46. 明治書院.
- 岡崎智巳・清水百合・小山悟（2000）「中国における学習者と教師の日本語学習に対する意識の相違」『日本語教育研究会誌』7(1)pp.2-3.
- 小河原義朗・河野俊之（2002）「教師の音声指導観と指導の実際」日本語教育方法研究会誌9(1)pp.2-3.
- 坪井佐奈枝（1989）「中国人学習者にみられる問題点とその指導」『講座日本語』vol24. pp.130-138.
- 中村則子（2013）「非母語話者教師と母語話者教師の発音指導—ベトナムにおけるアンケートの結果から—」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集39』pp.113-124.
- 村崎恭子（1990）「発音指導の方法」『講座日本語と日本語教育3』pp72-91.明治書院.
- 国際交流基金（2013）「日本語教育国・地域別情報 2013年度中国」日本語教育調査研究情報提供 <http://www.jpff.go.jp/j/japanese/survey/country/2013/china.html>（閲覧日 2014.8.10.）